

かいみみた死後の世界 1989年 評論社

レイモンド・ムーディ・Jr

バージニア大学卒、バージニア医科大学卒、哲学博士、医学博士

バージニア大学に在学していた1965年に初めて死後の世界の体験談を聞く。その後、数多くの死後の世界の体験者に面接して、この特異な現象の研究を行っている。

死とは何だろう？地球上に誕生した時からずっと、わたしたちはこの疑問をかかえてきた。この二、三年の間に、教会主催の心理学、哲学、社会学の勉強会、テレビ番組、市民クラブ、医学の専門家たちの会合などさまざまな集まりの場で、わたしは多くの人たちにこの疑問を投げかけてきた。こうした経験を通じて、わたしは、性格や職業の違いとは関わりなく、どんな人もこの話題に最も強い反応を示すといいきることができる。

しかし、非常に強い关心を寄せているにもかかわらず、ほとんどの人が死を話題にすることに強い抵抗を感じているのも動かしがたい事実である。これには少なくとも二つの理由がある。そのひとつは、主に心理学および文化的要素に根ざす理由である。死に関する話題はタブーなのだ。たとえどんな形であれ、死を身近に体験すると、たとえ間接的な体験であっても、なぜか自分自信の死を意識しないではいられなくなるし、自分自信の死が急に現実性を帯び、自分もいつかは死ななければならないのだと思ったりするものである。たとえば、医科大学に入って初めて解剖室に足を踏み入れ、自分とは縁もゆかりもない死体と対面したとき、ほとんどの医学学生はひどい不安に襲われる。わたし自身もそうだったのだが、わたしの場合、どうしてそのような反応を示したのか、今ならはっきりわかるような気がする。振り返ってみると、あの時わたしは目の前に死体となって横たわっている人を見て、この人はどういう人なのだろう、どんな原因で死んだのだろうというようなことだけを思いめぐらせていたのではなかった。確かにそのような気持もあった。しかし、あの時わたしは、あの台の上に決して死からのがれることができないわたし自身の象徴(シンボル)を見ていたのである。これほど明確なものではなかったとしても、「自分もいつかはこうなるのだ」というぼんやりとした予感が、わたしの心をよぎったに違いない。

これと同様、死を話題にすると間接的に死に近づくような気分に襲われる。まぎれもなく、多くの人々は、死について語ると、心の中に死を描き、死を身近に感じ、自分も絶対に死を避けることができないのだという事実に直面しないわけにはいかなくなると思っている。したがって、そんな重苦しい気分に落ち込まないよう、死を話題にすることをできるだけ避けようとする。

死について語るのがむずかしいもうひとつの理由は、ことばの問題である。ことばの本質に関する事なので、このほうが複雑である。人間のことばの大部分は、五感をなかだちにして体験できることを他者に伝達する役割を果たすものである。ところが大部分の人間にとて、死は意識をともなう体験を超越したものである。なぜなら、ほとんどの人は、死を体験したことがないから。

死について語ろうとするなら、社会的なタブーと、未体験であるために生じる根本的なことばの問題にからむジレンマに陥ってはならない。死について語るとき、わたしたちは結局、婉曲的な例をもちだしてしまう。だれもが体験することの中で、もっと心楽しいことや、よく知っていることに死をたとえる。

この種のたとえでもっとも一般的なのは、死を眠りに似たものだとする考え方であろう。わたしたちは自分自身に、死ぬということは眠りにつくようなものなのだと言い

聞かせている。こうしたいい方は、わたしたちの日常的な考え方やことばの中に現れるばかりでなく、多様な文化に支えられた歴史的文献の中にも繰り返し現れる。

「眠りにつかせる(トヴ・プット・トヴ・スリープ)」という表現について考えてみよう。眠らせてほしいといって自分のイヌを獣医にわたす場合と、同じことばを口にして自分の妻や夫を麻酔医にゆだねる場合とでは、同じことばを用いていても、常識的には意味内容は大きく違う。似た考えを持っていながら、別のたとえをひき合いにだす人もいる。そうした人々は、死ぬということは忘れることに似ているという。人は死ぬとあらゆる悲しみを忘れる、つらく苦しい思い出はすべて消えてしまうという考え方である。

死を「眠り」や「忘却」にたとえる考え方古くからあり、現在でも普遍的なものはあるが、根本的にわたしたちを納得させ、安心させるためには全然役に立たない。どちらも同じことを言っているのであって、ただ単に表現が違うだけである。どちらもなんとなく快い感じを与えるようなことばを選んではいるが、要するに、死とは意識を伴う一切の体験が完全に消滅してしまうこと以外のなにものでもないと言っているのである。もしもそうだとすれば、死には眠りや忘却が持っている長所がひとつもないことになる。眠りは人生の中でも積極的で望ましい体験である。目覚めが伴っているから。熟睡した後は一日中気分がいいし、仕事にも精が出る。眠ることに目覚めが伴わないとしたら、眠りの恩恵などというものはありえないはずである。また、意識を伴う一切の体験が完全に消滅することは、つらい記憶だけではなく、楽しい記憶の消滅も意味する。こうしてみると、わたしたちが実際に死に直面したとき、いずれの考え方からも真の慰めや希望を得ることなど、とうてい望めない。

死は意識の消滅であるとする見方を否定する考え方もある。これは、人間には物理的肉体の機能が停止し、終局的に破壊された後にも生き残る部分があるとする考え方で、こちらの方がむしろ古くからある。この生き残る部分は、靈魂、魂、精神、靈、自己、生命、意識などと呼ばれている。表現はどうあっても、物理的肉体が死を迎えた瞬間に、人間は別の世界に移り住むのだとするこの考えは、信仰の中でもっとも神聖な部分である。

世界中に点在する先史時代の遺跡には、物理的肉体が滅びても人間は生き続けるのだという信仰をうかがわせる証拠を見ることができる。死とはどういうことなのかという疑問に対する答として、結局わたしたちは、共に古い歴史をもち、現在でもなお広く一般に信じられている対照的な二つの答をもっているにすぎない。一方には、死とは意識の消滅であるとする人々があり、もう一方には、死とは魂なり精神が別の次元の世界に移行することであると確信している人々がいる。わたしは決してこの二つの答を否定するつもりはない。わたしの個人的な研究を報告したいと思っているだけである。

死に瀕した時の状況や、死を体験した人々のタイプが多種多様であるにもかかわらず、体験内容そのものには、驚くほどの共通点がある。この共通点は非常にはっきりしているので、わたしが集めた数多くの事例に共通して繰り返し現れる要素は簡単に選びだせる。こうした要素は15ばかりある。そこで、この共通点のすべてを含んでいる、理論的な「典型」ないしは「完全」なひとつの体験を、モデルとして組み立ててみた。それぞれの要素は、数多くの事例において、最も典型的な順序に従って配列してある。

わたしは瀕死の状態にあった。物理的な肉体の危機が頂点に達した時、担当の医師がわたしの死を宣告しているのが聞こえた。耳障りな音が聞こえ始めた。大きく響きわたる音だ。騒々しくうなるような音といったほうがいいかもしれない。同時に、長くて暗いトンネルの中を、猛烈な速度で通り抜けているような感じがした。それから突然、自分自身の物理的肉体から抜け出したのがわかった。しかしこの時はまだ、今までとおなじ物理的世界にいて、わたしはある距離を保った場所から、まるで傍観者

のように自分自身の物理的肉体を見つめていた。この異常な状態で、自分がついさきほど抜け出した物理的な肉体に蘇生術が施されるのを観察している。精神的には非常に混乱していた。

しばらくすると落ち着いてきて、現に自分がおかれている奇妙な状態に慣れてきた。わたしには今でも「体」が備わっているが、この体は先に抜け出した物理的肉体とは本質的に異質なもので、極めて特異な能力を持っていることがわかった。まもなく別のことが始まった。誰かがわたしに力をかすために、会いにきてくれた。すでに死亡している親戚とか友達の靈が、すぐそばにいるのがなんとなくわかった。そして、今まで一度も経験したことがないような愛と暖かさに満ちた靈—光の生命—が現れた。この光の生命は、わたしに自分の一生を総括されるために質問を投げかけた。具体的なことばを介在させずに質問したのである。さらに、わたしの生涯における主なできごとを連続的に、しかも一瞬のうちに再生して見せることで、総括の手助けをしてくれた。ある時点では、わたしは自分が一種の障壁とも境界ともいえるようなものに少しずつ近づいているのに気がついた。それはまぎれもなく、現世と来世との境目であった。しかし、わたしは現世にもどらなければならぬ、今はまだ死ぬ時ではないと思った。この時点で葛藤が生じた。なぜなら、わたしは今や死後の世界での体験にすっかり心を奪われていて、現世にもどりたくはなかったから。激しい歓喜、愛、やすらぎに圧倒されていた。ところが意に反して、どういうわけか、わたしは再び自分自身の物理的肉体と結合し、蘇生した。

その後、あの時の体験をほかの人々に話そうとしたけれど、うまくいかなかった。まず第一に、想像を絶するあの体験を、適切に表現できる言葉が全然見つからなかつた。それに、苦労して話しても、物笑いの種にされてしまった。だからもう誰にも話さない。しかし、あの体験をしたおかげで、わたしの人生は大きな影響を受けた。特に、死ということについて、中でも、死と人生との関係に関するわたしの考え方には、大きな影響を受けた。

この体験談は、特定の人の体験に基づいたものではないことを忘れないでほしい。これは、非常に多くの体験談に共通する要素を複合した、ひとつの「モデル」である。この体験談はあくまでも概念である。したがって、多くの実例を提示して、それぞれの体験談に共通する要素のひとつひとつについて詳しく検討してみようと思う。

しかしその前に、死の体験についてわたしがこれから行う説明を厳密なものとするために、いくつかの事実をはっきりさせておく必要がある。つまり、

- (1) さまざまな体験談には著しい類似性があるが、完全に同じ内容のものはひとつもない(もっとも、いくつかの体験談は酷似しているが)。
- (2) 先にモデルとして提示した複合体験に含まれている約15の要素をすべて報告した人はまだひとりもない。しかし、非常に多くの人が大半の要素について報告しており(8ないしはそれ以上)、12の要素を報告した人も数人いる。
- (3) 各体験者の報告にもとづいてまとめた複合体験にふくまれている要素のうちで、すべての体験談にあらわれる要素は一つもない。しかし2, 3の要素は、ほとんどの事例にでてくる。
- (4) わたしが構成した抽象モデルに含まれている要素で、一事例にしかあらわれない要素はひとつもない。各要素は、数多くの体験談に現れている。
- (5) 死に瀕している人が体験するさまざまな要素の配列については先に簡単にふれたが、わたしが作成した「理論的なモデル」の配列とは異なる事例もある。一例を挙げると、「モデル」に見られるように、物理的な肉体を抜け出してから「光の生命」に出会うのではなく、抜け出す以前に、あるいは抜け出すその瞬間に「光の生命」に出会ったという報告も多い。しかし、モデルにおける要素の配列は極めて典型的なものであり、これと大幅に異なる事例はめったにない。
- (6) 死に瀕している人が、先に想定した完璧な複合体験に踏み込む程度は、その人が実

際に臨床的な死を体験したのかどうか、また、臨床的な死を体験した場合には、どのくらいの間死んでいたかによって異なるようである。総体的に、死に瀕しただけの人の体験よりも、「臨床的に死んだ」人の体験談のほうがずっと鮮明だし、想定される完全な体験により近い。また、短時間「死んでいた」人よりも、長時間「死んでいた」人のほうが、より深く踏み込んでいくようである。

(7) 臨床的な死を宣告された後に、手当を受けて蘇生したが、先に提示したような共通の要素を一切体験しなかったと報告した人も2,3いる。事実この人たちは、自分が「死んだ」時のことを全く覚えていないといっている。わたしは非常に興味深い体験をした人たちとも話し合った。この人たちは、数年の間隔を置いて何度か臨床的な死を宣告されたのだが、ある時にはなんの体験もしなかったのに、別の時にはさまざまな体験をしたと報告している。

(8) 提示する事例は、主に面接を通じてわたしが収録した報告、話、説明である。この点を強調しておかなければならぬ。したがって、先に提示した想定される「完全な」体験に含まれているさまざまな要素が、ある事例に欠けているという注釈についても、必ずしもその事例を報告してくれた人の実際の体験に、その要素が含まれていないという意味ではない。その事例を報告してくれた人が、その要素については言及しなかった、あるいはその人の体験談の中に明確に現れていなかったという意味にすぎない。